

住民に共有される記憶の調査に基づく 町の同一性に関する考察

永井 友梨¹・尾崎 信²・中井 祐³

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail: nagai@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 工修 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail: osaki@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

³正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail: Yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

本研究では町の同一性という概念を取り上げ、住民の記憶がそれを支えていると考えた。対象地大分県竹田市において住民の記憶の調査を行い、時代による傾向や記憶の共有範囲について、記憶分布図という独自の手法等を用いて分析した。商店街の盛衰と記憶の傾向に関連が見られること、世代によりそれぞれ特徴的な記憶を共有していること、記憶の内容が同一性の認識を支えている可能性があることを示した。

キーワード: 同一性, 自伝的記憶, 竹田

1. 序論

(1) 背景と目的

町に住む者にとって重要なのは、町の「個性」ではなく「同一性」ではないか。つまり、他の町と比較した特徴ではなく、この町はこの町であり続けているという実感をいかに持てるかであろう。

一方、「記憶」は、心理学や脳科学の諸言説において、人が自己の同一性を認識する基盤であるとされている。そこで、ある町にまつわる住民の記憶が、その町の同一性を支える基盤となっているのではないかと考えた。

本研究では、住民の記憶が町の同一性を支えているという仮定の下、次の2点を目的とした。

1. 住民の記憶と町の変化との関係を明らかにする。
2. どのような記憶が、どのような範囲で住民の間に共有されているか明らかにする。

(2) 対象地

対象地には大分県竹田市を選定した。市街地の規模と領域性、歴史等の観点から、住民に対する記憶の調査が比較的容易であると考えられたことが選定理由である。

竹田市は大分県南西部に位置し、平成17年の合併後、面積は約480万㎡、人口は26,000人である。このうち研究対象とするのは、合併の中心となった豊後竹田駅周辺の約400m四方、域内人口約2,400人の地域とする。地理的には周囲を山に囲まれた盆地であり、北部を稲葉川が流

れている。地形や主要な通りについては図-1に示した。

歴史的には豊後国岡藩の城下町であり、戦後は周辺地域の商業中心として発展してきた。1970年代後半から大都市への人口流出、近隣ニュータウンの開発と大型店進出、1982と1990の大規模な水害等を受けて商店街が衰退した。現在でも人口減少と少子高齢化（2011時点で高齢化率39%）、域内に集積していた公共施設の域外移転が続いている。

(3) 既往研究と本研究の位置付け

地域の特質を分析する材料として記憶を扱った既往研究は複数存在するが、記憶が町の同一性を支えると考えて価値を置いた本研究は、主旨が異なるものである。

また竹田城下町の研究は、九州大学文学部地理学研究室による報告書¹⁾、金井の研究²⁾等があるが、住民の記憶を対象としたものはない。

2. 研究手法

(1) 記憶に関するモデル構築

「思い出」と呼べるような個人的な記憶は、心理学では自伝的記憶と呼ばれ、神谷³⁾はその要素として「人・活動・場所・時間」という枠組みを紹介している。これを参考に、対象地における予備調査の結果を踏まえて、図-2に示す記憶に関するモデルを作成した。

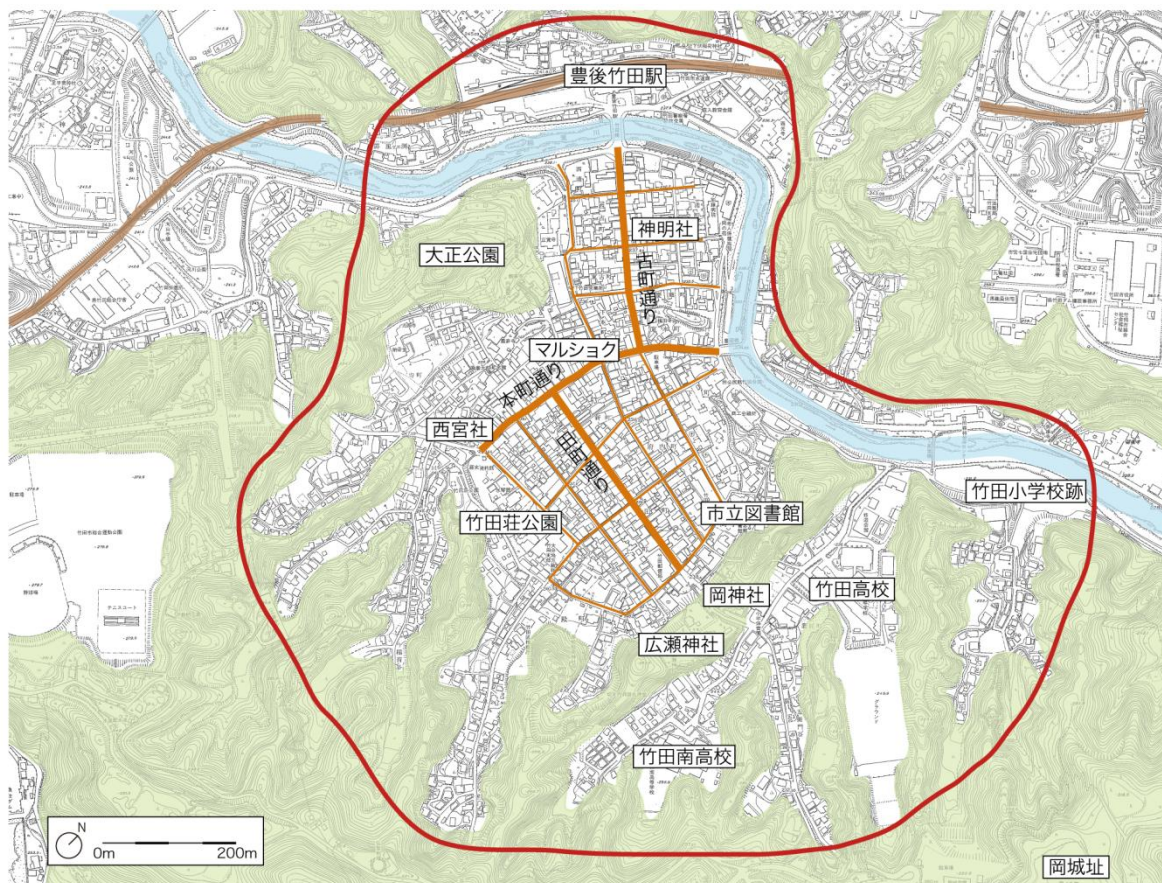


図-1 対象範囲（「竹田市白図」に加筆. 赤枠内部を対象範囲とする.）

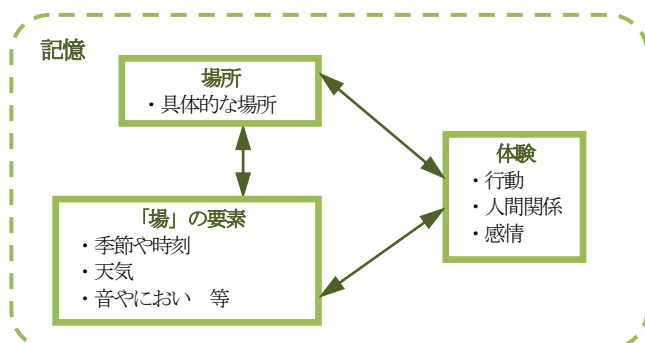


図-2 記憶のモデル

このように、「場所」「『場』の要素」「体験」の3要素が相互に関連し合って記憶を構成していると考え、本研究では、このうち特に「場所」と「体験」に重点を置いて分析することとした。

(2) 調査概要

研究手法は、住民に対するアンケートおよびヒアリング調査とした。また補助的に、町の変化を知るための地図・文献調査を行った。

a) アンケートおよびヒアリング調査

まず現地にて予備調査（ヒアリング）を行い、近年の町の変化や記憶の傾向について大まかに把握した。

次にその結果を踏まえてアンケートを作成し、現地にて本調査（アンケート・ヒアリング）を行った。本調査の概要について表-1、表-2に示す。

表-1 アンケート調査概要

実施期間	2010/11/27～12/2
実施方法と回答者数	戸別訪問 57 (29～84歳) 学校配布 155 (中学生～高校生)
対象者	対象地域内に居住している人、もしくは対象地域内に職場や学校がある人 (竹田での生活歴は問わないこととする)
項目	1. 竹田での思い出 [複数記述] (当時の年齢・場所・季節や時刻・内容等) 2. 町で特に変わったと感じること/変わらないと感じること 3. 最もかけがえのない思い出 4. 回答者属性 (年齢・性別・職業・居住歴) ※学校配布では項目2は含まない

表-2 ヒアリング調査概要

実施期間	2010/11/27～30
実施方法と回答者数	個別聞き取り 11 (32～86歳) 学校訪問 27 (小学4年生)
対象者	アンケート対象者と同様
内容	1. 竹田での思い出 →当時の状況等、より詳細に 2. 町の空間の変化 (施設の移転・インフラ整備の状況等) ※学校訪問では内容2は含まない

b) 文献・地図調査

町の変化を把握するために、主に次の資料を調査した。

- ・竹田市史⁴⁾
- ・竹田町報 (1947～1953)
- ・ゼンリン住宅地図 (1957～2000)

3. 分析1—町の変化と記憶の傾向

(1)概要

本章および次章では、アンケート項目1（竹田での思い出）を分析対象とする。まず本章の分析1では、時代による町の変化と記憶の傾向との関係を把握することを目的とした。

アンケート項目中の「当時の年齢」と「回答者の年齢」からその記憶がいつ頃のものであるか割り出し、表-3に示す4期の時代区分に従って分類する。そこから前述の記憶の要素のうち「場所」と「体験」、さらに「場所×体験の関係」について、時代による傾向や変化を分析した。

表-3 時代区分

対象とする時代は戦後～現在とし、町にとって重要と考えられる出来事を基準に4期に区分した。

区分	期間	傾向・特徴
I期	1945（終戦） ～1968（農協会館開業）	商店街全盛期前
II期	1968 ～1982（1度目の水害）	商店街全盛期
III期	1982 ～1995（竹田小学校移転）	水害と 商店街衰退
IV期	1995～現在	公共施設の移転

(2)分析結果

a)場所

「屋外の公園・寺社」「商店等」「自宅・友人の家等」の各場所が、記憶に出現する回数の変化を図-3に示す。なお、古い時代ほど当時を知る人の数自体が減るため、各時代で、回答者のうち当時小学生以上であった人の人数を母数として、10人当たりの出現回数で示している。

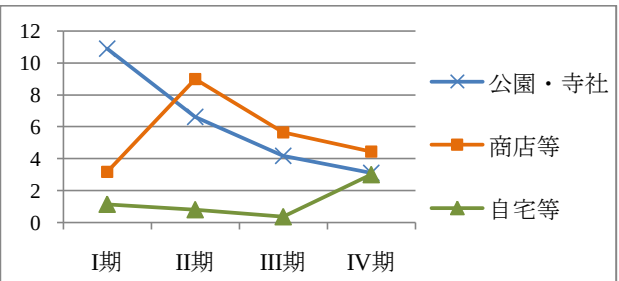


図-3 場所の時代変化

ここから、記憶の場所に関して次のことが読み取れる。

- ・屋外の公園・寺社は一貫して減少傾向にある。
- ・商店等は商店街全盛期であるII期に最も多く、その後減少している。
- ・自宅等のプライベートな場所が近年増加している。

また、個々の場所の地理的な配置を模式化すると図-4のようになり、I期は周縁部、II期以降は中心部に記憶の場所が多いことが分かる。これは、対象地が「周縁部の山と中心部の市街地」という形態であることを考えれば、

I期は屋外、II期以降は商店街での記憶が多いという図-3の傾向と整合する。またIII期以降は、中心部でもさらに少数の場所に集中していく傾向がある。

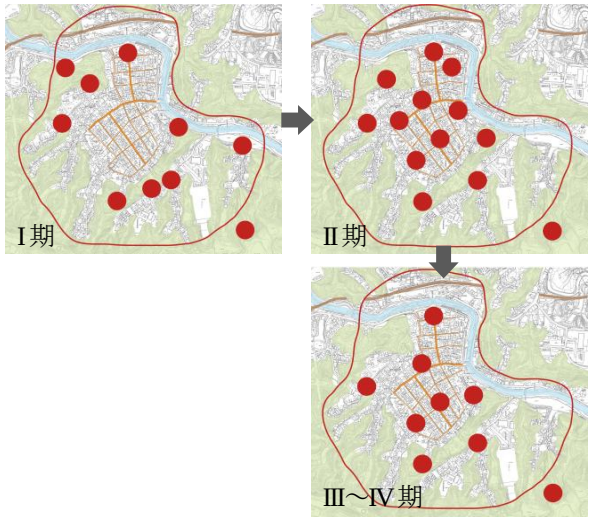


図-4 場所の分布の時代変化

b)体験

体験の内容について次のように12分類に整理し、時代変化を分析した。

表-4 体験の分類

分類		内容
A イベント系	A1	お祭り
	A2	季節の行事（初詣、お花見等）
	A3	その他のイベント（学校行事等）
B 友人・仲間と楽しく過ごす	B1 子供の頃の遊び	B1-a 公園等での外遊び
		B1-b 商店への寄り道等
		B1-c 自宅や友人宅で遊ぶ
		B1-d 帰り道でのお喋り
	B2	学校の部活動
	B3	大人になってからの仲間との余暇（スポーツ、習い事等）
	B4	お酒を飲む
	B5	恋人や特別な人との時間
C 家族・家庭		家庭内の延長的な体験（子供と遊ぶ、家族で食事に行く等）
D 自分の時間		自分一人で過ごす時間、一人になれる時間
E 仕事・生活の一環	E1	仕事の一環
	E2	その他の日課（買い物、通勤通学等）

このうち傾向が明確であったものの一部を図-5に示す。

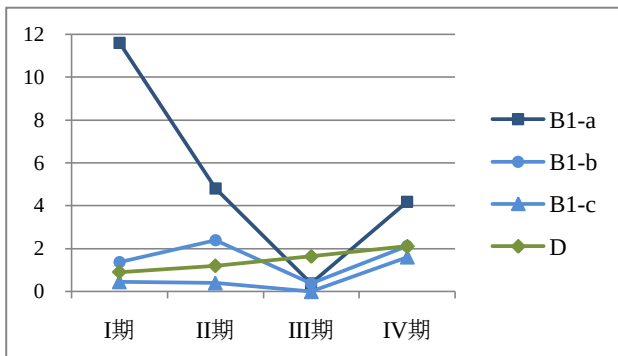


図-5 体験の時代変化

- B1の子供時代の遊びのうち、I期ではB1-aの外遊びが大半を占めていたが、II期以降B1-bの商店街やB1-cの家で遊んだ記憶も増えている。（なおIII期が極端に少ないのは、この頃に子供時代を過ごした世代の回答者が少ないためである。）
- Dの一人で過ごすプライベートな時間の記憶は一貫して漸増傾向にある。

c) 場所×体験

どのような場所にどのような体験の記憶があるか、a) で使用した場所の4分類とb) で使用した体験の12分類の組み合わせを分析した。例として商店等について、記憶の総数と体験の内訳を図-6に示す。

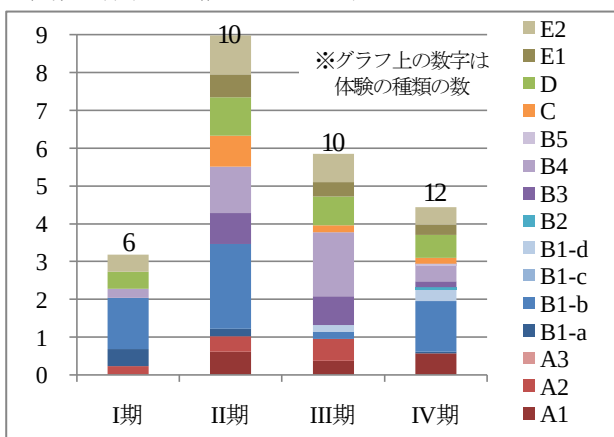


図-6 場所×体験の関係の時代変化

- II期で体験の内容が多様化している。
- III期以降記憶の総数が減少しても多様性は比較的保持されている。

この傾向は他の場所でも同様であり、近年では少数の特定の場所が、多様な体験の場になっていると考えられる。

4. 分析2—記憶の共有状況

(1) 概要

分析2では、住民の間でどのような記憶が、どのような世代的・時代的範囲で共有されているか把握することを目的とした。そこで考案したのが図-7の「記憶分布図」で、横軸に時間、縦軸に回答者の年齢をとって記憶をプ

ロットすることで、その共有範囲を見るものである。

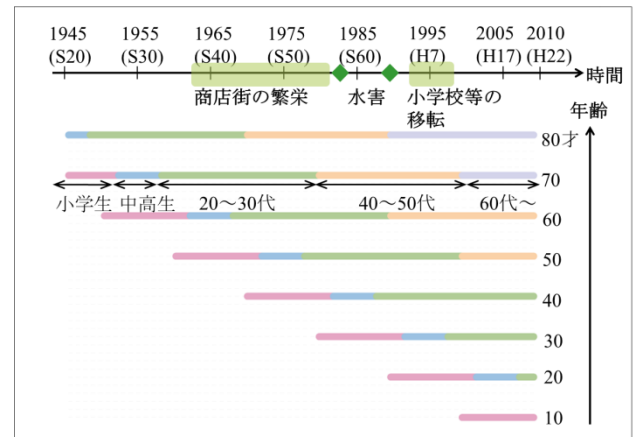


図-7 記憶分布図

(2) 分析結果

a) 場所

岡城と稲葉川

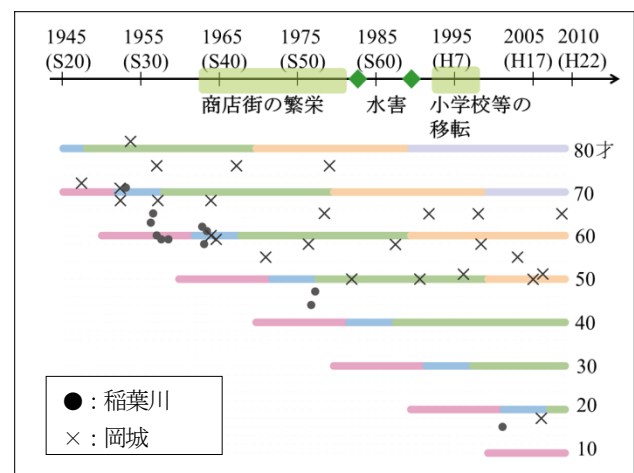


図-8 記憶の分布—岡城・稲葉川

- 竹田のシンボルと言える岡城の記憶はどの時代にも一定して存在する。ただし若い世代の記憶は少ない。
- 稲葉川には子供時代の記憶が集中しているが、1970年前後ではほぼ途切れている。

商店街

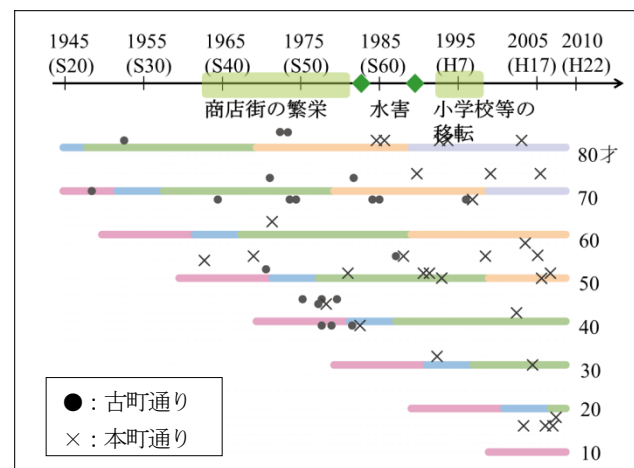


図-9 記憶の分布—商店街

- ・主要な通りである古町通り・本町通りにはいずれも幅広い世代の記憶がある。
- ・比較すると水害を境に、古町から本町へと記憶の中心が移っていることが分かる。

b) 体験

商店街での体験

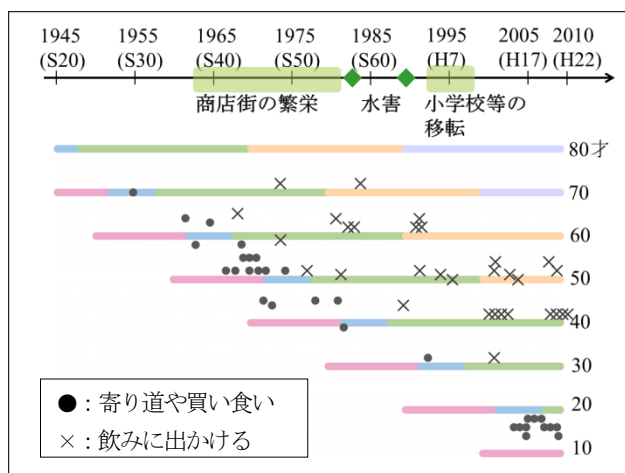


図-10 記憶の分布—寄り道と飲み

- ・子供時代の寄り道や買い食いの記憶と、大人たちが飲みに出かける記憶のいずれも、商店街の衰退後もなくなっていない。世代的にも広く共有されている。

このように、具体的な場所に絞って見ると時代や世代により様々な差異があり、各世代の住民がそれぞれ特徴的な記憶を共有していることになる。ただし、子供時代は周縁部の山で遊ぶとか、仕事帰りに商店街で一杯飲むといった典型的な記憶のパターンに大きな変化はなく、世代に関わらず幅広く共有されていることも分かった。

5. 分析3—町の記憶と同一性

(1) 概要

本章では、アンケート項目2（町で特に変わった/あまり変わらないと感ずること）および3（最もかけがえのない思い出）の回答を分析対象とする。これらの項目は、回答者が竹田の同一性をどのように感じているのか知る手掛かりとして設けたもので、項目1（竹田での思い出）の回答傾向とも照らし合わせながら分析を行った。

(2) 分析結果

表-5 項目2・3の回答内容

回答内容	人数	回答者の項目1での回答傾向
2. 変わったと感ずること（回答あり：45人）		
商店街の衰退	25人	全盛期の活気ある商店街の思い出が多い
過疎化・少子高齢化	25人	

2. あまり変わらないと感ずること（回答あり：30人）		
周縁部の自然	10人	子供時代なら外遊び、大人になってからは散歩等、自然の中での記憶が多い
町の人の気質	13人	友人との思い出やお祭り等、町の人と関わった記憶が多い
3. 最もかけがえのない思い出（回答あり：26人）		
お祭り等特別なイベント	9人	3の回答と同じ時期の記憶が中心となる
この町での生活そのもの	5人	過去から現在まで、幅広い範囲の記憶を回答

商業地として辿った歴史と、盆地という地形的性質から併せて、「移り変わる人間の生活と、それを取り巻く変わらない自然」という認識の体系が竹田にはあるようである。人の気質に触れる回答が多いことも特徴的で、伝統的に住民同士の距離が近かったことが窺える。

またこれらの回答内容の背後には、多くの場合その根拠となるような記憶があることが読み取れた。こうした場合、その人にとっての竹田の同一性を記憶が支えていると言えるのではないだろうか。

6. 結論

本研究では以下の成果を挙げた。

- ・対象地において、時代の変化に伴う住民の記憶の傾向を明らかにした。
- ・住民の間に共有されている記憶の内容と共有範囲を明らかにし、記憶分布図という形で示した。
- ・住民が町の同一性を認識するいくつかの体系を示し、それが記憶によって支えられている可能性を指摘した。この、町の同一性と記憶の関係については、対象地に限らず一般にも展開できる可能性がある。

謝辞：本研究の調査においては、竹田市の方々に多大な御協力を頂いた。竹田市役所の志賀郁夫氏、宮成公一郎氏はじめ職員の方々、アンケートとヒアリングに御協力下さった260名の市民の方々に、厚く謝意を表する。

参考文献

- 1) 金井雄太：近世竹田における城下町設計の論理, 2010
- 2) 九州大学文学部地理学研究室：近世都市 竹田—空間構成と都市のイメージ, 1989
- 3) 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美編著：自伝的記憶の心理学, 北大路書房, pp.33-43, 2008
- 4) 賀川光夫監修：竹田市史, 竹田市史刊行会, 1984